

平成26年7月28日(月)

老球の細道40

バスケットの神様マイケル・ジョーダン

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

バスケットボールをプレーする者にとって「神様！」と言える人は現在ただ一人。あのマイケル・ジョーダンである。現役の頃のジョーダンは、ボードの上に乗っかるコインを取ったほどのゴムまりのようなバネを持っていた。ここぞという時に必ず活躍する勝負強さ、メンタルの強さはバスケットボールのみならず、世界中のアスリートのあこがれの存在であった。

このジョーダンとて、最初から神様であったわけではない。天才に共通のものすごい努力の人であった。高校時代は、身長が小さくて試合に出してもらえない。一軍にも入れてもらえなかった。そのことが、後にジョーダンの負けん気に火をつけたようである。その後、身長が伸びてチームの一軍に所属することができるようになっても努力することを忘れず、二軍の練習にも参加して人一倍練習をしたという伝説はあまりにも有名である。

2009年9月11日、アメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドでバスケットボール殿堂入りの式典が行われた。当時式典でのジョーダンのスピーチが話題になった。ジョーダンの子どもの頃からのバスケットボール人生を振り返った内容で、悔しい思いをし、やる気を起こさせた出来事を中心に語られた。その中でも素晴らしかったのはスピーチの締め。一つ一つの単語まで選び抜かれたスポーツスピーチ史上に残る秀逸の内容だったという。当時の『月刊バスケットボール』に掲載されていたので紹介したい。

「バスケットボールは私にとってすべてでした。私の逃げ場であり、心の平穏を見つきたいときにいつも行く場であり、激しい心の痛みの原因であると同時に、誰も想像できないほど強い感情、喜びや満足の感情の源でもありました。

私とバスケットボールとの関係は時を経て変化していき、そのことでバスケットボールに対して敬意と愛情を抱くようになりました。人々から必要とされ、敬意を払われ、思ってもいなかったような形で何百万人という人たちと情熱を分かち合うことができる機会を与えてくれました。そのことによって、私が直接触れることがなかった何百万という人たちにも、努力と忍耐と前向きな姿勢によって、それぞれの目標を達成することができるのだという希望を与えることができたのなら嬉しいです。

今日、私はバスケットボール殿堂入りという栄誉を与えられたわけですが、この瞬間がバスケットボールとの関係の終わりだとは思っていません。ずっと、前に始めたことを、この先もただとにかく継続していくだけのことです。そのうち、私が50歳でバスケットボールをしている姿を見ることになるかもしれません。笑わないでください。絶対ないとは言いません。何しろ、限界も、恐怖と同じように多くの場合は幻想に過ぎないのですから」

今でもあちこちで、NO23のユニフォームを着たり、ナイキのエアジョーダンを身に付けてジョーダンの真似をするプレーヤーは後を絶たないが、ジョーダンの努力を真似しようとするのはあまり聞いたことがない。

「私は失敗を受け入れることができる。しかし、挑戦しないことは受け入れられない」

・・・マイケル・ジョーダン・・・